

たまのよこやま

江戸から明治そして
シオサイト



東京都埋蔵文化財センター報

72

武蔵台遺跡・武蔵国分寺跡関連遺跡

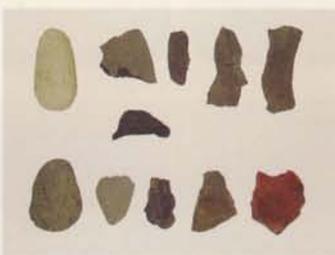
所在地：府中市武蔵台二丁目10他
 調査期間：2003年10月～2007年10月
 調査面積：約47,000㎡



旧石器時代の石器集中と礫群。すぐ横に崖があり、崖に沿って遺物が集中して出土している様子がわかる。



旧石器時代の礫群



旧石器時代最古級の石器



平安時代の竪穴住居跡

武蔵台遺跡・武蔵国分寺跡関連遺跡は、府中市武蔵台二丁目に位置する遺跡です。平成15年から今年まで発掘してきましたが、一部を除き、発掘調査が終了したので概要を説明します。

遺跡は都立府中病院の敷地内にあり、武蔵野台地武蔵野面と立川面との境にある「国分寺崖線」のすぐ上に相当します。縄文時代の竪穴住居跡1軒、平安時代の竪穴住居跡6軒などが発見されましたが、遺物の多くは旧石器時代に属するもので約65,000点の石器や礫が出土しました。旧石器時代の遺跡は石器を製作・使用した場である「石器集中」と、石蒸し料理用の礫を置いた「礫群」から構成されていますが、石器集中約130基、礫群約150基が発見されました。発掘した面積が広いということもありますが、これほど多くの遺物が出土した遺跡は、東京都内にはほとんどありません。ただし、本遺跡のある国分寺崖線に沿った地域（世田谷区・調布市・三鷹市・小金井市・国分寺市・府中市）は、都内でも有数の旧石

器時代遺跡の密集地で、周りにも大きな遺跡が認められます。現在でも崖線の下から湧き水が湧くところがあるので、旧石器時代にも湧き水があって飲み水に恵まれた暮らしやすい土地だったのかもしれませんが、また、出土した遺物には旧石器時代の初期に属するものから終末期に属するものまであり、継続して人々が暮らしていたことが分かります。特に約20,000年前と約24,000年前の遺物が多いのですが、約37,000年前の遺物も出土しています。この約37,000年前のものは、現在日本列島で確実に分かっている最古級の遺物です。とはいえ同じ時期の遺跡が都内だけで約30件もあるのですが、本遺跡の周辺にその時期の遺跡が集中しており、最古級の時期では都内に限らず日本列島内で最大規模です。整理作業が本格的に始まりましたので、今後、最古級の遺物をはじめ旧石器時代の遺跡の性格を詳しく検討していきたいと思えます。

(伊藤)

くぬぎや 櫛谷遺跡

所在地：八王子市戸吹町 1468 他

調査期間：2005 年 9 月～2007 年 8 月

調査面積：約 17,800 m²

1. 段切遺構を持つ
掘立柱建物跡群

櫛谷遺跡では、これまでの調査で縄文時代早期後半期の陥穴土坑群・中期の集落跡、古代の住居跡と製鉄遺構群、中世末から近世の屋敷跡など多時期の遺構・遺物が発見されました。このうち今回は、中世末～近世の遺構群に的を絞って紹介します。

遺跡の周辺には、北西に戸吹城跡、北東に高月城跡、東に滝山城跡、南西に浄福寺城跡、八王子城跡と戦国期の城郭が存在するという歴史的背景に加え、北側の隣地には新編武蔵風土記稿に載る、天台宗無量寺が所在しています。

中世から近世の遺構群は、事業地中央に位置し、平成 18 年度の調査区内に集中し、北方に流れる沢を挟み、南北 2 地点に分かれて検出されています。東側にはやや比高差が見られ、段下の西側は川道に面した東向きの傾斜面を中心に、わずかな段切遺構を持つ掘立柱建物跡群（写真 1）と地下式坑や土坑墓が検出されています（写真 2）。

一方の東側段上には、重複する掘立柱建物跡群に並存して、囲いとなる溝と、掘立柱建物



2. 土坑群

跡が検出され、囲溝の内側には地下式坑が多数検出されています（写真 3）。地下式坑は、建物跡が重複することと並行して、構築された時間差のあることが観察されています。



3. 掘立柱建物跡と地下式坑

の石製品、提・釘・銅や鉛の弾丸などの金属製品が出土しています。

出土した遺物から、建物跡が 16 世紀の後半から 17 世紀中葉までの時期幅のある事が確認されています。この時期の天正・文禄・慶長期には、小田原北条氏が滅び豊臣・徳川氏へと治世が目まぐるしく移り変わります。この建物跡の主たちは、どのような集団か、また、どのような階層の者であるかは、後々明らかになると思われますが、検出した遺構群や出土した遺物からは、土着居住民のたくましく生きた姿を本遺跡の調査結果から感じ取ることができるのではないのでしょうか。（田中）

建物跡や関係する遺構からは、青磁・灰釉皿などの陶磁器類や内耳土器、白・砥石・石鍋・板碑など

汐留シオサイト今いま昔むかし

昔を探してぶ千散

汐留... ここはかつて、静かな波が寄せる砂浜でした。江戸時代の初めごろ、その頃の技術を集めて大規模な埋立事業が行われ、仙台藩伊達家、会津藩保科家、龍野藩脇坂家など諸大名の江戸屋敷が建てられました。

明治維新を迎えると銅の精錬所が建設されるなど、外国の先端技術や知識が導入され、さらに、日本で初めての鉄道が敷かれ、構内には火力発電所も建てられました。

そう、あの唄、“汽～笛～声新橋を～”の旧新橋停車場が置かれた場所です。

現在、この地には先端テクノロジー満載の超高層ビルが林立し、昭和の頃の面影さえも見ることはできませんが、あちらこちらに様々な形でアレンジされた「昔」が残されています。そんな「昔」を探してぶらりと歩いてみてはいかがでしょうか。

東新橋二丁目公園



新橋停車場構内で発見された機関車用転車台（写真左）の基礎石が、公園内（写真上）でモニュメントとして円形に配置され使用されています。

新橋6
イタリア公園

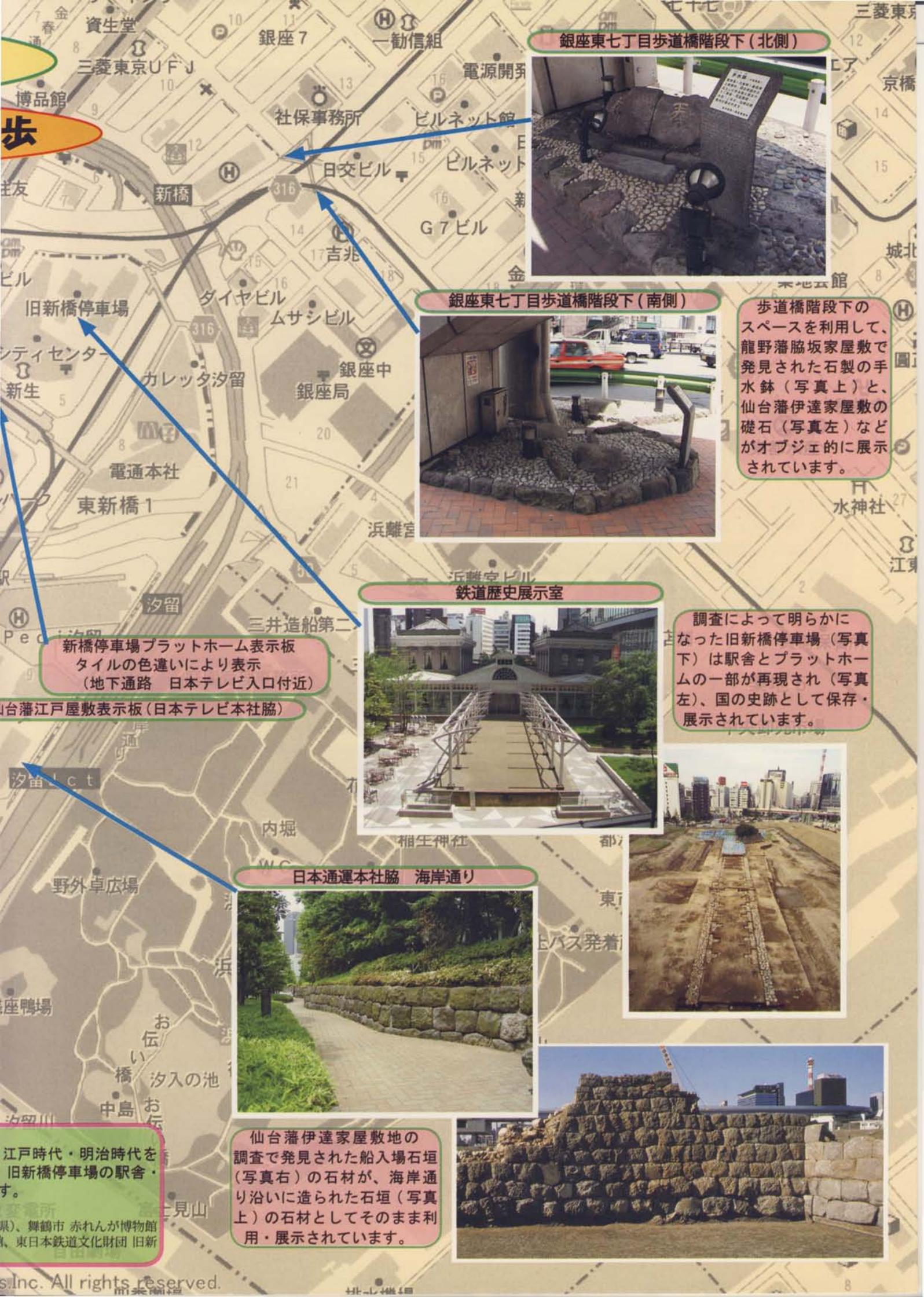


新橋停車場構内で発見された発電所煙突基礎（写真左）のレンガは公園内（写真上）の施設に使われています。

汐留遺跡

旧国鉄貨物線汐留駅跡地の再開発に伴い、平成4年から9年間をかけて総面積266,000㎡の範囲で発掘調査が行われました。中心に膨大な数の遺構・遺物が発見されていますが、なかでも仙台藩伊達家、会津藩保科家、龍野藩脇坂家の江戸屋敷の調査や、プラットフォーム・機関車転車台・火力発電所、さらには外国の技術が導入された銅吹所などの調査には注目すべきものがあります。これらの報告書は平成18年度末までに「汐留遺跡Ⅰ～Ⅳ」として計22冊が刊行されています。

また、発見された遺物等の資料は、東京都教育委員会が保管していますが、収蔵資料以外の一部出土資料については、たつの市立龍野歴史文化資料館（兵庫県）、常滑民俗資料館（愛知県）、会津若松市教育委員会（福島県）、国立歴史民俗博物館（千葉県）、港区教育委員会、羽村市郷土博物館、江戸東京博物館、橋場鉄道展示室、東京大学大学院工学系研究科、昭和女子大学（以上東京都）などで、展示を含めた活用がなされています。



銀座東七丁目歩道橋階段下(北側)



銀座東七丁目歩道橋階段下(南側)



歩道橋階段下のスペースを利用して、龍野藩脇坂家屋敷で発見された石製の手水鉢(写真上)と、仙台藩伊達家屋敷の礎石(写真左)などがオブジェ的に展示されています。

鉄道歴史展示室



調査によって明らかになった旧新橋停車場(写真下)は駅舎とプラットホームの一部が再現され(写真左)、国の史跡として保存・展示されています。



新橋停車場プラットホーム表示板
タイルの色違いにより表示
(地下通路 日本テレビ入口付近)

仙台藩江戸屋敷表示板(日本テレビ本社脇)

日本通運本社脇 海岸通り



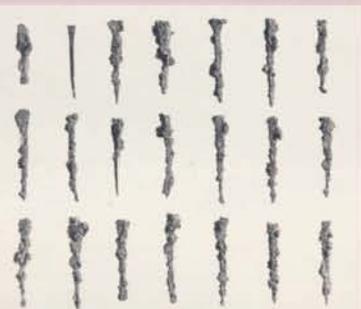
仙台藩伊達家屋敷地の調査で発見された船入場石垣(写真右)の石材が、海岸通り沿いに造られた石垣(写真上)の石材としてそのまま利用・展示されています。

江戸時代・明治時代を
旧新橋停車場の駅舎・
です。
(県)、舞鶴市 赤れんが博物館
、東日本鉄道文化財団 旧新

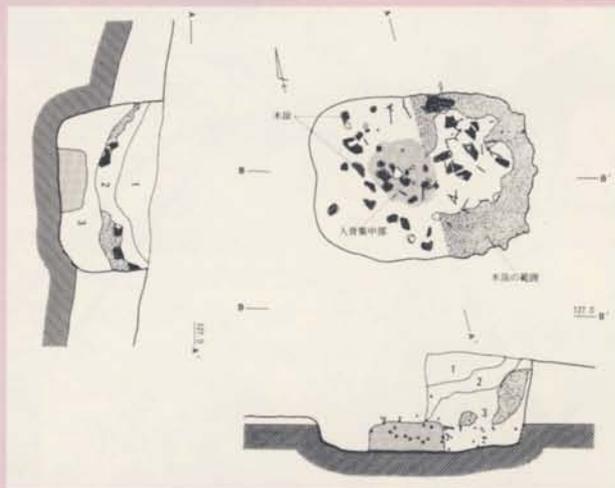
釘と火葬墓

奈良～平安時代には遺骸を火葬にして埋葬する風習が、都や地方で流行します。多摩ニュータウンNo.105A遺跡でも、尾根上から近接して3基の火葬墓が検出されました。墓は長さ1m、幅0.7m、深さ0.4mの長方形の穴で、おそらく、近親者が葬られていたのでしょう。墓の一つ、1号墓の中央部からは火葬骨のほかに頭部を平に作った鉄釘38本と土師器片が検出されました。遺骨は木炭で囲まれた木櫃（一辺50×30cmの箱）内に鉄釘とともに納められていました。木櫃はあの有名な太安万侶墓（奈良県）

にも採用されています。釘は火熱を受けていることから、もともと遺体を納めていた木の櫃に使われたものではないかと考え



No.105A遺跡1号火葬墓出土の鉄釘



No.105A遺跡1号火葬墓（9世紀）

られます。周囲の木炭も火葬の際に、木棺や燃料材が炭化したものであったかもしれません。古代人にとっては、遺骨だけではなく共に焼かれた棺や接合材としての鉄釘さえも、故人を偲ぶよすがとして大切に木櫃に納めたものと想像されます。ここに、日本人独特の感性を読み取ることができます。残念ながら、火葬場は確認できませんでしたが、当時の人たちは山の端に立ちのぼる白い煙を見て、亡き人へ想いを馳せていたにちがひありません。（松崎）

保存科学室 だより

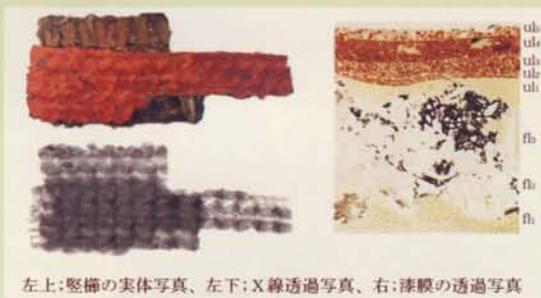
今回は、世田谷区・岡本前
耕地遺跡から出土した**櫛**

について紹介いたします。

昨年までの第3次調査では、仙川の古い流路の一部が検出されました。通常、植物は埋没すると朽ちてしまいますが、土が常に水分を多く含んでいると、数千年の時を越えて私たちの前に姿を現すことがあります。この調査でも縄文時代後期の土器を伴って木製品や加工材などが多く発見されました。その中に、櫛の破片が含まれていたのです。

残っていたのは歯の根本にあたる部分のみで、わずか数センチの小さな破片でしたが、貴重な事例であったことから、保存処理と同時にいくつかの科学的な調査を試みました。その結果、縄文時代の人々の優れた技術がぎっしり詰まっていることが判明したのです。

まず、X線透過写真からは、櫛の構造が判ります。約5mm間隔で並べた太さ1.5mmほどの細い櫛の歯を、約4mm間隔で歯と直行するように並べた



左上:櫛の実体写真、左下:X線透過写真、右:漆膜の透過写真

細い材で両側から挟み、これらを太さ約0.4mmの糸で編み込んで固定するという、非常に繊細な細工が施されていました。

SEMによる定性分析の結果には鉄と水銀のピークが認められ、漆の赤色顔料にはベンガラと朱が併せ用いられていたようです。

昭和女子大の武田昭子先生によって行われた漆の構造分析からは、3層の下地の上に5層の漆が重ねられていたこと、下地には炭粉と鉱物の粉末が併せて用いられていたことなどが明らかになりました。

同時に出土した他の漆塗り木器は、炭粉下地に1～2層の漆を塗ったものが多く、この櫛に特別な思いが込められていたかがうかがわれます。

（長佐古）

縄文の秋は忙しい。実りの秋、収穫の秋である。今年の遺跡庭園の木の実、ここ数年内で最も豊作。クリ、クルミ、クヌギ、コナラ、トチノミといった木の実を主食とする縄文人にとっては、この季節に一年分の食料を確保しなければならない、一年で最も忙しい季節。しかも、シカ、イノシシ、リス、ネズミ、さらにはカケスたちとの競争でもある。

どんぐり拾いは、一粒拾うと二粒目がほしくなり、三つ四つとどんどん拾い続けたいくなる。これがまたなぜか病みつきになるくらいおもしろい。採集民のDNAがそうさせるのかもしれない。ゲームばかりに夢中になっていないで、どんぐりの一つも拾うと楽しいんですけどね。もちろん当の縄文人にとっては死活問題。おそらく家族総出で必死になって集めていたに違いない。なにしろ一年分の食糧確保となると、これがなかなかの大仕事でもあったはず。

木の実のうちで最初に収穫できるのが、トチノミ。今年の遺跡庭園では、9月18日に最初の実を収穫。縄文人はこのトチノミを好んで食しているが、実はどんぐりの中で最もあくが強く、土器で煮てさらに流水で何日もさらなければならない。現代の都会人では水道代がかかってできませんよね。

トチノミに続いて落ちるのが、マテバシイ。どんぐりの中で唯一あくがなく、ほんのりと甘い。さらにクヌギ、コナラ、シラカシと続き、休む暇もない。

ところで、集めたどんぐりをどう調理していたのか。実はこの点についてはまったく分かっていないというのが正直なところ。縄文時代の遺跡から、クッキー状あるいはハンバーグ状に炭化したものが出土しているが、その正確な成分については残念ながら未だはっきりと分析されてはいない。唯一、民俗例としてトチモチやジザイ餅、コザワシといったどんぐり団子の食べ方が伝わっている。また、韓国でもムックと^{ようかんじょう}羊羹状に加工したものがある。



たわわに実るトチノミ



ばら蒔かれたように散らばるコナラ



真っ赤に熟したガマズミ



落葉に埋れる復元住居

山梨県北斗市の^{さけのみぼ}酒呑場遺跡から、約5,000年前の縄文土器から“大豆”の痕跡が見つかったという報道が10月に入ってきた。すでに熊本などでも後期の土器に大豆の痕跡が確認されている。仮に縄文時代に大豆を栽培していたとなると、これまでのどんぐりを主食としていたという定説が大幅に書き改めなければならない。ひょっとすると縄文人の秋は「それほど忙しくはなかった」ということになるのかもしれない。考古学の新しい発見がまた歴史を塗り変える。かな？

食べ物の話ばかりになってしまいましたが最後にもう二つ。この季節、縄文時代の初めの頃、多摩川の上流までサケが昇ってきている。あきる野市の前田耕地遺跡から見つかったたくさんのサケの歯がそれを証明している。産卵で遡上したサケを捕らえて、囲炉裏の上で^{くんせい}燻製にしていたのかもしれない。一度でいいからそんなサケを捕らえてみたいものです。カムバックサーモン。そして、デザートにはガマズミの実。庭園のガマズミは、ここ数年大きく成長したコナラの陰になって、実のつきが悪い。よくジャムにして楽しんでいましたが、今年は採らずに残しておくことにしよう。

今年もはや12月、ボチボチ熊の毛皮を準備する季節になってきました。

(小菜)

体験教室

古代のアクセサリを作ろう

勾玉作り教室 1月26日(土) 9:30~11:30

耳飾作り教室 1月26日(土) 13:30~15:30

文化財講演会

第5回 1月16日(水)

「斧の考古学」 飯塚武司

第6回 2月23日(土)

「縄文時代のカゴ編組製品の技法・素材研究から」 佐々木由香

発掘調査発表会

3月22日(土) 13:00~16:00

発表遺跡未定

縄文クッキーレシピ

好評にお答えして、縄文クッキーのレシピを簡単に掲載しておきます。

縄文クッキー 10枚分

材 料

マテバシイ(皮をむいたもの) 50個 -100g

スタジイ・・・20個

クルミ・・・20g

クリ・・・35g

エゴマ・・・少々

干しぶどう・15g

ハチミツ・・・大匙1杯

タマゴ・・・1個



マテバシイ、スタジイ、クルミ、クリをそれぞれ粉にしたものを、ハチミツとタマゴでつないでよく混ぜ合わせます。十分こねたところで食べやすい大きさにして、焼いた石の上かオーブンでじっくりと焼き上げてください。後の味付けはお好みでどうぞ。

縄文食体験

今秋も昨年に引き続き、遺跡庭園で縄文食体験を行いました。当日はTVの撮影なども入ってドタバタした状況で始まりましたが、前日の台風も通過し、台風一過の秋晴れのもとで一日縄文食を楽しんでいただきました。

今回の縄文食のメインディッシュは、縄文クッキーと猪鍋。

縄文クッキーは、近所で採取したマテバシイをつぶして粉にして、タマゴでつないでクッキー状にしたものを、住居内の炉で熱した石板の上で焼き上げました。焼きたてのクッキーは「結構食べられるね」と、まずまずの評判。参考までに上記にレシピを掲載しておきました。来年の秋にでもぜひお試しください。

猪鍋は、複製の縄文土器で猪肉をベースに、きのこ、サトイモをグツグツとじっくり煮込んだもので、隠し味に塩を少々入れました。こちらも用意した2つの縄文鍋はあっという間に品切れとなりました。手作りに加えて、この秋空がなお一層おいしさを引き出してくれたものと思います。来年もまた新しいメニューを考えて、縄文食を体験してみたいと思っています。



たまのよこやま 72

東京都埋蔵文化財センター

2007年12月31日発行

〒206-0033 多摩市落合 1-14-2

TEL 042-373-5296

<http://www.tef.or.jp/maibun/>